

毎月抄管見

毎月抄の真偽に就いては種々論があり、私見も述べたことがある（「毎月抄論改」日本文芸研究十三巻一号）。偽書説は、現在に於ては、「確証とすべききめてがなく、今後有力な証拠が出ない限り、毎月抄は真作とすべきであらう」（石田吉貞「毎月抄・未來記・雨中吟は定家の著書か」解釈と鑑賞二十七巻七号）といふ考へ方が最も穩当であると思はれる。本稿もさういふ考へ方を基にして論を進めて行く。然し、例へ後に確証が出て、偽書であることが判明しても、内容や歴史的な影響から見ても、中世の歌論書として、非常に重要な又勝れたものの一つであることに変わりはないと思ふ。有心と秀逸に就いては前稿で述べたので、此処ではそれ以外の問題を覚書風に採りあげたい。

一 萬葉集の事

毎月抄で萬葉集に直接関係のあるのは次の箇所である。（以下歌論書からの引用は、特にことわりぬ限り、日本古典文学大系所収のものはその依りに依り、他は日本歌学大系に依る。毎月抄は古語深秘抄本と対校した。なほ次の文のイ〜チは論述の便宜上私に附したものである。）

福田雄作

（イ）抑哥はただ日来しるし申し候侍りひしごとく、萬葉よりこのかたの勅撰をしづかに御覽せられて、代々にかはり・ゆき候ひける姿どもをば、心得候へ。（ロ）それにとりて、勅撰の哥なればとて、必ず哥ごととにわたりてまなぶべからず。（ハ）人にとりてなひ世にしたがひて、哥の興發見え侍り。（ニ）萬葉はげに代もあがり、人の心もさえて、今の世にまなぶともさらにをよぶべからず。（ホ）「殊に」初心の時をのづから・古集をよむ事あるべからず。（ヘ）但稽古年かさなり風骨よみ定まりて。後は、又萬葉のやうを存せざらん好士は、無下の事とそおほえ侍る。（ト）稽古の後よむべきにとりても、心あるべきにや。（チ）すべてよむまじきすがた詞侍なりよむまじき姿詞といふは、あまりに俗にちかく、又おそろしげなるたぐひを申し侍るべし。

右の文中(ニ)は「げに」といふ語から、定家独自の考へ方ではなくて、先行の説或いは当時一般の説を承けて書いたものであることが分る。又、(イ)の「萬葉よりこのかた云々」に、日本古典文学大系では「倭成の古来風体抄はその意味で書かれている。」と註してゐる。古来風體抄の萬葉集に關する所説中、毎月抄の萬葉觀に類似するものを抜き出すと次の様なものがある。

1、かみ萬葉集よりはじめて、中古、古今・後撰・拾遺、しも後拾遺よりこなたぎまの歌、ときよのうつりゆくにしたがひて、姿もこと葉もあらたまりゆくありさまを、代々の撰集にみえたるを、はしくしるし申すべきなり。(2、四一六)

2、上古の歌はわざと姿をかざり詞をみがむとせざれども、代もあがり、人の心もすなほにして、たと詞にまかせていひいだせれども、心ふかく、すがたも高くきこゆるなるべし。(2、四二二)

3、そのころまでは、歌のよきあしきなど、しひてえらぶことは、なかりけるにや。公宴の歌も、私の家々の歌も、そのむしろによめる程のうたは、かずのまゝにいりたるやうにぞあるべき。(2、四二三)

4、萬葉集よりのち、古今集のえらばるゝことは、代々へだゝり、としくかずつもりて、歌のすがた詞づかひも、ことのほかにかはるべし。(2、四二三)

5、此集のころまでは、歌の言葉に人の常に読みける事どもを、ときよのうつりかはるまゝには、よまずなりにける言葉どものあまたあるなるべし。(2、四五八)

6、歌どもはまことに心もをかしく、ことばづかひもこのもしく

みゆる歌どもはおほかるべし。第三の巻にや大宰帥大伴卿さけをほめたる歌ども十三首までいれり。又第十六巻にや池田朝臣、おほらわの朝臣などやうの者どもの、かたみにたはぶれりかはしたる歌などは、まなぶべしともみえざるべし。且はこれらはこの集にとりての誹諧歌と申す歌にこそ待るめれ。(2四五九)

7、まことに證歌にもなりぬべく、文字づかひも證になりぬべき歌どもはおほく(2、四五九)

8、萬葉集の歌はよく心えてとりてもよむべきなりとぞふるき入申し侍りし。(2、四五九)

9、萬葉集は、とき世久しくへだりうつりて、歌の姿ことばうちまかせてまなびがたかるべし。(2、四七九)

以上の古来風體抄からの引用と、毎月抄を較べて見ると、毎月抄が如何に古来風體抄の所説を忠実に繼承してをるかといふことが分ると思ふ。

(イ)は1、(ニ)は2・9、(ホ)は9、(ト)は8と、夫々殆ど同一であり、(ハ)は7の様な視方と密接な関聯がある。4・5は(イ)と関聯し、(チ)は3・6に見える様な萬葉集の性質に由来する。又、(ロ)・(ハ)の考へ方も古来風體抄に見える処であり、(ニ)・(ホ)の様な萬葉集に対する態度は「此集(私云古今集)の項はひよりぞ、歌のよきあしきも、えらびさだめられたれば、歌の本體には、たと古今集をあぶぎ信すべき事なり。」(古来風體抄、2、四二三)と裏表である。

古来風體抄及びそれを承け継ぐ毎月抄の萬葉觀は、和歌に対する歴史的認識に基づく。頭昭は「大和歌は萬葉を本體と待るに」(六

百番陳狀、寄海窓」といひ、俊成・定家とはっきり対立してゐる。

然し、此の顯昭の萬葉尊重は、同じ六百番陳狀で、「和歌の詞の新古相交の糸は、あながちに不可禁か。」(野分)といつたり、「又右の作者のいやを聞きよからずと待るはさも待らん。萬葉詞なり。」

(寄木恋)と皮肉雜りにいつたりしてをる処から見ると、何の程度の歴史的認識に基づくものであるか疑はしい。史的認識の欠除といふ点では「故六条左京大夫顯輔卿被申侍しは、先親修理 大夫顯季卿 予に萬葉集講じ給ひし時云、萬葉集はたゞ和歌の籠にて納箱中可持。常に披みて不可好説。和歌損ずる物なりと云々。又後日、俊頼朝臣同様風談仕りき。」(六百番陳狀、元日宴)の人々の態度も、同様に考へて良いと思ふ。顯季・顯輔・俊頼の萬葉観は後拾遺集序の「易きことをかくして、難き事を現はせり。そのかみのこと今の世に叶はずして、惑へる者多し。」と同列に在るものであるが、後拾遺集序の後半は一見史的認識の上に立つ言葉の様であるが、前半と併せ考へると、明確な歴史的認識は無かつたと考へるべきである。史的認識を欠いた顯昭の萬葉主義は、結局、萬葉集の形式的な模倣、知識的な振取に了り、生命ある和歌を創造することに失敗した。

和歌を歴史的に扱へたのは俊成の歌論の勝れた点であるが、定家も和歌の歴史と自らの位置とに就いて明かな自覚を有してゐた。自らの生活感情に遠く、知的認識の対象となるのみで了つてしまふ恐れのある萬葉集を敬遠し、古今集・寛平以往、或いは伊勢物語・源氏物語等共通の基盤に立つものを採つたのである。然し、俊成・定家共に、萬葉集を無視したり全く捨ててしまつたりしたのは勿論ない。此は前引の古采風體抄や毎月抄の文からでも明かである。

俊成や定家が如何なる意味で萬葉集を重んじたかを、最もはっきりと示してをるのは、7の「まことに證歌にもなりぬべく、文字づかひも證になりぬべき歌ども、おほく」と、(へ)の「但稽古年かさなり風骨よみ定まる。後は、又萬葉のやうを存せざらん好士は、無下の事とぞおぼえ侍る。」とである。歌に関する知識・學問として価値を認めてをるのである。歌は學問で詠むのではないから、初心の時は歌に関する才学は必要ではない。然し相当程度上達した後は、歌会・歌合の席上で、やはり才学が要求せられる。古采風體抄で萬葉集に多くの頁をさき、歌によつては註釈迄添へてをるのもさういふ意味からである。

尤も、萬葉集が學問の対象であつたのは、俊成・定家に限らず、梨壺の五人以来一般のことであつた。前引の顯季・顯輔・俊頼等の態度もそれを示し、無名抄に勝命の言葉として伝へる、清輔が「晴の哥よまんとては、『大事はいかにも古き集を見てこそ』といひて、萬葉集を返々見られ侍し。」(七二)といふのも同様である。又、後鳥羽院御口伝の「世の常には、たゞ萬葉集ばかりをよみたるやうを心得てをくべし。」(一四二)や、八雲御抄の「凡歌の子細をふかくしらむには、萬葉集にすぎたる物あるべからず。」(校本八雲御抄とその研究、二二〇)も同じである。一見、後鳥羽院御口伝や八雲御抄は萬葉集を最も重視し、毎月抄は批判的である様に見えるのは、両者の視点が異なるからである。毎月抄では初心者の練習方法に対する注意として述べ、後鳥羽院御口伝・八雲御抄は才学の問題として述べてをる処から生じた相違である。「まだしき程は、萬葉集見たる折は百首の哥なかばは萬葉集の歌詠まれ」

(後鳥羽院御口伝、一四三)といふ風になるから定家は初心者には戒めたので、「稽古年かきなり風骨よみ定まる」後りては、又萬葉のやうを存せざらん好士は、無下の事とぞおほえ侍る。」のである。

さて、(ト)・(チ)は稽古の後によむ場合の注意である。かういふ注意も、毎月抄独自のものではなく、顯季・顯輔・俊賴や古来風體抄8に共通の考へ方である。八雲御抄にも「たゞよく／＼ふるき歌を見学してさる物から、しりがほに、ふるきうけられぬ詞をこのみよむべからず。」(二二〇—二二二)とか、「後白河院の梁塵秘抄といふものにいま様の上手のやうをかゝせ給へる中に、『歌よむともがらも、萬葉集のやうなどいひてくせみよめ共、まことのよき歌よみになりぬれば、やす／＼とありのまゝの事とこそきこゆれ。なに事も長じぬればかくのごとし』と云り。まことによく／＼幽玄をむねとしてよむべき事なり。」(二二四)とか述べてゐる。

(チ)の「すべてよむまじきすがた詞待なり

ふは、あまりに俗にちかく、又おそろしげなるたぐひを申し侍るべし。」は兩本でかなりの相違があるが、意味する処に差はなく、何れでも通ずる。「よむまじき云々」の処は古典文学大系本の目うつりによる脱落と考へて良からうと思ふ。(チ)は萬葉風と直接関聯せさせて考へられるのが普通の様である。然し毎月抄を(ホ)・(ハ)・(ト)・(チ)と続けて読んで来ると、萬葉風と「俗にちかく、又おそろしげなる」風體とは果して等符号で繋がるであらうか。

(ニ)と(ホ)及び(ハ)から萬葉の風體と古跡とはほど重なり合ふと考へて良い。(ハ)に依れば萬葉のやうは稽古の後は必須の

ものであるが、稽古の後でも詠む時には注意を要する(ト)。(チ)は、その注意を要する即ち「心あるべきにヤ」を承けて書かれてるのである。故に(チ)は口訳すれば「決して(萬葉集の中で詠んではならぬ姿詞がございます)萬葉集の中で現在詠んではならぬ姿詞といふのは、あまりにも俗に近く、又恐ろしい感じの云々」となる。俗にちかく、又おそろしげは萬葉の風體の中の特殊なものを指すと解すべきで、此をそのまま萬葉の風體と重ね合せると、其は「よむまじき姿詞」であるから、萬葉の風體は詠んではならぬことになり、(ホ)・(ハ)・(ト)と矛盾する。又(ニ)「萬葉集

はげに代もあがり、人の心もさえて、ま此・世に・まなぶともさらにをよぶべからず。」も「俗にちかく、又おそろしげ」とは重なり合はぬ。「俗にちかく、又おそろしげ」を萬葉集中の特殊な風體と解すると、それは時代の移り変りによつてさう感ぜられる様になつたものもあるかも知れぬけれど、古来風體抄の3・6に見られる様な、萬葉集そのものの性質に由る処が大きいと考へて良からう。

十體論の部分で「すなはにやさしき姿」である「幽玄様・事可然様・麗様・有心跡」「どもの中にも古めかしき哥どもはまゝ見え候へども、それは古跡ながらも苦しからぬ姿にて候。」といつてをるのも、「俗にちかく、又おそろしげ」が萬葉の風體全體に關するものでなく、「歌のよきあしきなど、しひてえらぶことはなか」つた為に萬葉集に入れられた、萬葉集中の一部の歌にのみ關する語であると解することに依つて、素直に理解することが出来る。以上の様に毎月抄を讀んで来ると、鬼拉體は「俗にちかく、又おそろしげなる」體でもなく、全面的に萬葉集の風體と重り合ふものでもないかと考へら

れる。

此処で「よむまじき姿詞」と、後にある「申さば、すべて詞に、あしきもなくよろしきも有るべからず。たゞつゞけがらにて、哥の勝劣侍るべし。」との關係に就いて考へて置きたい。兩者は矛盾してをる様に見える。然し、つゞけがらによるといふ時の詞は、歌詞として認められる範圍内で考へられてをり、幽玄といひ、鬼拉といふも皆其の範圍の中でのことである。それに対して、「俗にちかく、又おそろしげ」なのは、「すべてよむまじき」と全く歌詞として認められぬのである。萬葉集中のものではないが、「しりたきといへる雖、聞俗人之語、未_レ詠_ニ和歌之詞也」(千五百番歌合、七七一番)といふ様なものがそれに當る。萬葉集に關する処にそれが述べられたのは、萬葉集は性質上「俗にちかく、又おそろしげ」なものが、精撰せられた勅撰集より多く、又萬葉集といふ權威を背景にして無自覺に詠まれることがあつたからであらう。以上の様に考へると、「よむまじき姿詞」と、詞は「つゞけがら」によるといふことは矛盾なく理解することが出来る。

なほ、詞のつゞけがらに就いては、無名抄にも「歌はたと同じ詞なれども、続けがら・いひがらにてよくもあしくも聞ゆるなり。」(三八)といひ、「とこねの事」(九七—九八)の条にも同じ考へ方が述べてある。又、八雲御抄には「歌はたとせんずる所、ふるきことばによりて、その心をつくるべし。いはばよき詞もなし、わろきことばもなし。只つゞけがらにぜんあくはある也。萬葉集にあればとて、よしそやし、はしけやしなどいひ、古今によめればとて、ちるぞめでたき、わびしらになどいへる詞よむべきにあらず。」(二一二)とある。これは毎月抄の場合と同様に理解して良から

る。

終りに、定家が歌合の判で萬葉集にふれたものをあげておく。今迄述べて来た処の傍證ともなるであらう。

秋の虫手玉もゆらにをる機をたれきてみよと野への夕くれ(女房、勝)

月はこれあはれを人につくさせて西につみにはさそふ成けり(釈阿)

左秋虫假_ニ機婦札々聲_ニ晚野感_ニ行人悠々之望_ニ詞雖_レ為_ニ雲北秋雁之行_ニ心深_ニ於江南春水之色_ニ其義偏慣_ニ于上世其體已超_ニ于中古_ニ右寄_ニ贈望於秋月_ニ凝_ニ觀念於四天_ニ許也幽玄之詞雖_ニ頗異_レ他勝負之思更難_レ及_レ左者歟(千五百番歌合、七五一番)

行あはぬ方のまよひに霜ををくにみしまりか麻のさ衣(通具、持)

山里は雪よりさきも任わひぬ初霜かれの長月の空(範宗)

左は萬葉の古風を希ひ、右は九秋のくれを悲しむ、姿詞はかはりて侍れど、をのくおもへる所其難侍らねば、左右相似たり。持にや侍らん。(建保二八十六歌合、五〇、秋霜)

都おもふ袖もかたくほしあへすあへの島山露深くして(通具、持)

月よ猶さやの中山なかくになにに面影の秋のふるさと

萬葉のあへの島山夕霧にといひ、古今のさやの中山なかなかにといへる本誓の心、何れもおもひ所はべれば、勝負申がたくや侍らん。(同歌合、五七、秋旅)

二 花實の事

或人・花実の事を哥にたて申して侍るにとりて、古の哥はみ
實を存して花を忘れ、近代の哥は花をのみ心に掛けて、實には
目もかけぬからと申しためり。

新撰萬葉集の序文に次の様な文がある。

倩見歌體、雖誠見古知今、而以今比古。新作花也、舊製實也。
以花比實、今人情彩翦錦多述可憐之句、古人心緒縹素、少綴不
整之艶(平安和歌叢一所取)

毎月抄は「或人」とあるから、新撰萬葉集の序文と直接的な關係
の有無は何ともいへぬけれど、考へ方としては兩者全く同一であ
る。なほ序文の中には「所謂仰弥高、錯謬堅者也」といふ句も見え
る。此の方は有名な句で、千載集の序にも引いてをるから、毎月
抄の「抑哥は仰げばいよ／＼たかき事に侍るめりと先賢の遺訓も、今こそ
思ひしられて侍れ。」との直接的な關係は一層考へにくいかも知れ
ぬ。然し俊成のことをいふ時は、亡父卿(亡父)とか故禪門とか俊
成であることの方に分る様ないひ方をしてをるから、先賢(先哲)とい
ふ一般的ないひ方の時は俊成ではないと考へて良い。古語深秘抄本
の「先哲の庭訓」は爰で、「遺訓」の方が妥当である。

花實論の場合と論語からの引用の場合とを考へ併せると、毎月抄
に新撰萬葉集の序文の影響を考へることも、一概に無理であるとは
いひ切れぬ様に思はれる。

いはゆる實と申す(「は心、花と申す」は詞也。必ず古の哥の詞
は、つよよくこゆるを實と申すとは定めがたかるべし。古人の詠

作にも、心のなからん哥をば無實哥とぞ申すべき。今の人のよめ
らんにも・心の・うるはしくたゞしからんをば有實・「哥」とぞ申
し侍るべく候。——中略——但、心詞の二をとかもにわたらんはい
ふに及ばず、心のかけたらんよりは、詞のつたなきに・こそ侍
らめ。

花實論に於て、詞に花を、心に實を充てるのは古今集序以来の考
へ方で、特殊な考へ方ではない。漢文序に「浮詞雲興、艶流泉涌。
其実皆落、其花孤榮。」や「花山僧正、尤得歌體」。然其詞甚花而
少実。」といふ文がある。唯、前者には古実、今花といふ考へ
方もあり、観点の異なる二つが入り混つてをる。「いまめかし」や
「現代的」といふ言葉を考へても分る様に、今が花であるといふの
は、何の時代でも抱かれ易い、一般的な感情である。そこで、詞花
・心実と、今花・古実といふ異なつた観点に基づく二つの考へ方が
混同せられ易かつたのである。毎月抄の文は、実と今とを重んずる
立場から、その誤りを正したものである。

「うるはしくたゞし」に就いては前稿にも述べたが、特定の美的
微標を示す言葉ではないと考へられる。詠歌の心的態度と關係して
考ふべきものと思ふ。「蒙氣さして心底みだりがはしき折は、いか
によまんと案ずれども、有心昧出来・せず。」や「蒙昧も散じて、性
機もうるはしくなりて、本跡によまるゝ事にて候。」などを承ける
ものである。古語深秘抄本には「心のうるはしくたゞし」と「心の」
といふ言葉が入つてをるが、さうすればはつきりする。此處は深秘
抄本に依つて解すべきであらう。

續いて花実相兼、心詞相具が理想として述べられる。これは前引

の古今集漢文序にも見られ、「心あまりて詞たらず」といふのも、心詞相具の理想から、足らぬ処をあげて貶したのである。相具が不可能な場合は心をといふのが一般的な考へ方であらう。新撰體腦では「心姿あひ具することかたくば先づ心をとるべし。」(一、六四)といひ、八雲御抄もはつきり同じ立場をとつてゐる。然し當時は一方に、無名抄に俊恵の語として伝へる「哥は花麗を先とす。」(四〇)や「姿に花麗極まりぬれば、又自ら餘情となる。」(六二)の様な考へ方もあり、心の重視に定家歌論の特質の一つを見ることができよう。

三 自ら知る事

誠に哥の中道は、唯自ら知るべきにて侍りるなり。更に人の是こそと申すによるべからず候。

近代秀歌に「おろそかなる親のおしへとは、『哥はひろく見とをくきく道にあらず。心よりいで、みづからささる物也』とばかりぞ、申し侍りしかど」といひ、詠歌大概に「和哥無^三師匠」只以^三舊歌為^三師、染^三心於古風、習^三詞於先達者、誰人不^三詠之哉」といつてをると共通する考へ方である。かういふ考へ方は必ずしも俊成・定家に獨自のものではなく、俊頼は「かやうの事は習ひ伝ふべきにもあらず。たゞわが心を得てささるべきなり。」(一、一三七)といひ、清輔も袋草子上巻に「和歌昔より無^三師」(2、五八)といつてゐる。然し清輔のは續けて「而能因始長能^三為師。」といひ、「無^三師」を主眼にしたものではなく、「自^三此為^三師」を中心にした文である。俊頼のも題詠にのみ関する言で、定家の言とは重みが違ふ。當時に於て「自ら知る」ことを定家程強調した人は無

いといつて良い。

自ら知るといふことは、何時でも変らぬ稽古の鉄則で、後に心敬も「さかゝるに入はて、後の稽古は、抄物の上のみにはあるへからず、万物諸道の上に、心をつけて、わか哥道のささりの力とすへしと也」(岩橋下。心敬集論集、三一〇)といひ、「いかばかりの聖教抄物に眼をさらせるとも、修行に冷燮自知の所なくば至りがたしとなり。」(さよめごと。校註さよめごと、九九)といつて「さとり」「自知」の重要性を力説してゐる。

定家の「無師匠」「自知」の強調は、中世の稽古論の発端に位置するものとして、重要な意味を有するものであるといへよう。

四 白氏文集第一第二巻の事

又古詩の心詞をとりてよむ事、凡そ哥にいましめ侍るならひとふるくも申したれども、いたくにくからずこそ。しげうこのまで、時々ませたらんは、一ふしある事にてや侍らん。(つねに)^{の所}

白氏文集の第一第二巻の中に大要・侍り。かれを被見せよとぞ申しをき侍りし。詩は心をけだかくすます物にて候。尤哥よまん時貴人の御前高などならば、心中ひそかに吟じ、さらぬ會席ならば高吟もすべし。哥にはまづ心をよくすますは、一の習にて侍り也。我心に、日ごろおもしろしと思ひ得たらん詩にてみ侍る

も、又哥にても心にきて、それを力にてよむべし。

詩と和歌とは一応区別して考へるのが普通であつた様である。

1、右、三千世界は眼前に盡きぬなど詩にて聞けばいみじくこそ侍れど、歌にては聞きよからず。耳にも及ばず。(六百番歌)

合、秋、広澤池眺望、二七番)

2、左申云、埋るゝ古寺などいへるわたり聞きよからず。

判云―中略―右母に埋るゝは優にこそ侍れ。古寺や古寺上方にして即事など詩にかくは優に侍れど、歌にはまことに艶ならざるにや。(同歌合、秋、蔦、二番)

3、紅霞は、詩などにはつくる事なれど、今紅とをける少いかにぞ聞ゆるうへに、(民部卿家歌合、山花、一番)

4、左方申云―中略―霞の光、詩などには聞なれたるやうに侍るを、哥にはいまた承及ばず。如何。右方申云、哥には誠にきゝなれず侍れども、霞の光まことにたしかに侍る物なり。しかれば難にあらず。(四十五番歌合、一番、春山朝)

5、右方申云、瀧つ岩根の早春、詩の題には聞なれて、哥のことはには珍しくえ聞でや侍らむ。(百番歌合、六番、春)

以上は、漢詩的なものを歌に取込まうとする傾向が、一般的に可成りあつたことを示すと共に、漢詩と和歌とは違ふといふ考へ方も相當にあつたことを示してをる。然し5の難に對して家隆は「早春ことなる難には侍るまし」といひ、1、2、3の判者である俊成は、別の處では

5、白氏文集古萬葉集などは、聊か取すぐせるにとがなきにやあらん。まことによくなりにけるものはかれをまなべるとみゆるに、なさけそふわざなればなるべし。(中宮亮重家朝臣家歌合、山花、五番)

と、白氏文集と萬葉集を並べ稱した。

6、陳狀に云、一葉と申事は胡詠集に、立秋題に、一葉落庭と申題にて、詩を作たる事の候也。その心歎。然は秋日初て一葉落

はしめ候歎。又云、―中略―秋のきたる心には、早臨二一葉一將老程とつくりて、詩にもかよひて、ことに興有心地し侍れば、右の勝にや侍らん。(廿二番歌合、閑庭秋來、五番)

7、詩歌は其體異なれど、風情は同じこそは儒家の先達も被申合侍りしか。―中略―此申狀事新しく侍れど、和漢のかはりめにまどひ、詩歌の風體を不弁罷りなりぬる口惜しき陳じ申し侍るなり。(六百番陳狀、寄遊女恋)

6、7は共に頭昭の例である。新古今風に漢詩の影響が強いのは周知のことであるが、右の例から見ると、和歌と漢詩との關聯を考へ、漢詩的なものを和歌の中に取り入れようとした傾向は、御子左家或いは其を中心とした人々のみでなく、反對の立場にあつた頭昭に於ても強かつたといふことができよう。

さういふ一般的な傾向の中で、最も明確に漢詩尊重をいひきつたのが定家である。

白氏文集第一第二帙常可深通握和歌之心一(詠歌大概)

此は毎月抄の文とほゞ同意である。定家が最も重んじたのは、白氏文集第一第二帙であつたことが分るが、毎月抄の文に依ると此は俊成の庭訓であつた様である。即ち毎月抄の「申しをき侍りし」といふのは、自分(定家)がではなくて、亡父がといふ意に解せられる。

第一第二帙に就いて、日本古典文學大系の頭註では、第一第二巻と同様に考へてあるけれど、さうではない。白樂天は白氏文集の後序に、自ら次の如く述べてゐる。

前三年元微之為予編次文集而叙之凡五秩每秩十卷訖長慶二年冬號白氏長慶集

白氏文集の帙分けは編纂當初からのもので、第一第二帙とは、巻一から巻二十迄を含むものであることが分る。

然るに此處に、もう一つ別の帙分けに依る本がある。其は現存の刊本としては最も古い、南宋紹興年間の刊本である。南宋紹興は、一一三一（鳥羽天皇の天承元年）から、一一六二（二条天皇の応保二年）の間である。可能性といふことからいへば、定家の白氏文集は、紹興本或は其の元になつたものがあるとすれば其でもあり得る訳である。然し次に述べる理由に依り、定家のいふ白氏文集は紹興本ではないと考へて良い。

まづ、平安時代流布の白氏文集は紹興本の様な編次ではなかつた。白氏文集には、前後続集本と先詩後筆本とがあるが、前者が古く後者は改篇本である。(註1) 紹興本は改篇本に属し、平安時代流布のものは前者系統のものであつたと思はれる。平安時代に引用せられた白氏文集の詩句は紹興本系ではなく、又拾玉集、拾遺愚草の文集百首の題も紹興本系とは異なる。更に、紹興本は、全七十一巻を十帙に分けてゐるが、一二帙は巻一(諷論)一から巻十四(律詩二)迄である。處が律詩は八迄あり、中途半端な切り方となる。紹興本では律詩八は、三帙の最終巻に當る。それに對して、後序にいふ帙分けに依れば、一二帙で律詩の終迄を含み、丁度前集の詩全部を指すことになる。

以上から、白氏文集第一第二帙といふ定家の語は、巻二十、律詩の終迄で、前集の詩總てを含むと解すべきである。第一第二帙といふと、いかにも白詩の一部のみを指すものの様に聞えるけれど、實際は白樂天の詩といふことと大差はない譯である。

さて前引の毎月抄の「詩は心をけだかくすます物にて候」以下の

文を、有心體の説明をした文と読み比べて見ると、詩の重視と有心體の主張とは密接な關聯があることが分る。詩は單に技法とか詞とかのみでなく、非常に深い處で、定家の和歌と本質的な係りがあるつたと考へねばならぬ。(註2)

五 「おほえさせ給て候」の読み方

本稿で取扱つた項目の中、毎月抄では最も始に出て来る事柄であるが、歌論と直接關係がないので、最後に述べて置く。

問題は「給」の読み方である。日本古典文學大系では「給へて候」としてある。然し同書の校異に依ると「へ」の送つてあるものはなく、歌學大系本にも古語深秘抄本にも送り假名はない。

結論を先にいふと、次にあげる様な例によつて此處は「給ひて候」と四段活用に使むべきである。

- 1、かなしくて、袖を顔におしあてつるを、あやしげに御覽すれば、心得させまらせじとて、さりげなくもてなしつつ、「あくびをせられて、かく目に涙のうきたる」と申せば、「みな知りてさぶらふ」と仰せらるるに、あはれにも、かたじけなくもおほえさせ給へば、「いかに知らせ給へるぞ」と申せば(註3)

(讃岐典侍日記、古典全書、一八一)

- 2、世次が思事こそ侍れ。便なきことなれど、あすともしらす身にて侍れば、たゞ申てん。この一品宮の御ありさまのゆかしくおほえさせ給にこそ、又いのちおしくはべれ。(註4) (大鏡、日本古典文學大系、二四八)

此等の「おほえさせ給ふ」を語學的にどう解釋するかには問題が

あるが(註5)、共に、譏諷と解することもできさうに見える例である。なほ普通の解とは異なるけれど、源氏物語の次の例も、同様に考へることができるのではないかと思ふ。

3、おりにつけてはわすれぬさまなる御心よせのありかたくはらからなともえいとかうまてはおはせぬわさそなと人くはきこえしらすあさやかならぬふる人との心にはかゝるかたを心にしめてきこゆわかき人は時くもみたてまつりならひていまはとことさまになりたまはむをさうくしくいかにこひしくおほえさせたまはんとときこえあへり(さわらひ、源氏物語大成、一六八二—一六八三)

異文もあるけれど、右の本文で読む場合は、1、2と同様に「おほえさせたまはん」を解することができる。

毎月抄の「おほえさせ給て候」は、右の三例と同じものであると考へられる。

註

(1) 白氏文集の文献的研究は、花房英樹氏の「白氏文集の批判的研究」に詳しい。

(2) 定家と漢詩を考へるに當つては、九条の學問的雰圍氣も考慮する必要がある(村山修一「藤原定家」五八一—六四)

定家の和歌と漢詩との關係に就いては、赤羽淑氏の「定家の『韻歌百二十八首和歌』について」(文芸研究、三十九集)参照。

(3) 北条忠雄氏の「謙遜『給ふる』の成立」(解釈、七卷一號)に引かれた例。北条氏は該論文で、毎月抄を「給ひて

候」として引いてをられる。

(4) 橋純一氏の挿註大鏡通釋に於て指摘せられた例。

(5) 北条忠雄前掲論文、中村法「『覚え給ふ』の或る場合」

(国語国文、十卷四号)参照。

猶、引用文の所在を示す数字の中。アラビヤ数字は巻数を、漢数字は頁数を示す。

(卅七・十一・十)

(大阪府教育委員会指導主事)